

## PB-130

### チームで取り組む乳がん患者の対応

武蔵野赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、乳腺科<sup>2)</sup>、外科<sup>3)</sup>

○西巻 佳子<sup>1)</sup>、松田 実<sup>2)</sup>、嘉和知 靖之<sup>3)</sup>、鳥屋 洋一<sup>2)</sup>、笠原 舞<sup>2)</sup>、篠 美香子<sup>1)</sup>、鬼澤 道子<sup>1)</sup>、信吉 香織<sup>1)</sup>

はじめに) 当院は、2010年4月からがん患者カウンセリング実施と同時に乳がん看護認定看護師(以降CEN)が病棟と外来兼務となった。乳がん患者ケアの質の向上を図ることを目的に活動を開始したが、当初のCEN外来日は不定期な状況で、術前乳がん患者のカウンセリングが主であった。2011年より外来や関連部署との連絡方法を明確にし、医師・看護師らと共にチームで乳がん患者ケアを実践している。2013年度は乳がん患者カウンセリング対象者の拡大や患者の病期に必要なケアの提供を目標に活動したため、活動内容および今後の課題について報告する。

活動内容) 乳腺外来及び関連部署からの依頼に応じケアを実施した。リンパ浮腫ケア(23件)が最も多く、治療選択意思決定支援(6件)、治療や経過に対する不安など精神面の対応(6件)、他にセクシャリティーやリマンマの相談等であった。術前の乳がん患者に限らず、術後患者や再発患者も対象として乳がん患者カウンセリング(8件)を実施した。リンパ浮腫ケアが増し、カウンセリングの対象者とリンパ浮腫ケアが重なった時は、経過観察中のリンパ浮腫患者を優先したため、カウンセリングが出来ず前年度(27件)に比べ件数が減少した。

考察) がん患者カウンセリング、リンパ浮腫ケア共に時間を要し、全ての依頼に対応することは現状では困難である。リンパ浮腫ケア件数は増し、長期の治療期間を要することが多いため、専門外来を設立するなど体制を整備し、継続したケアを提供できることが望ましい。課題) 乳がん患者のサポートを行うために外来時間の調整・工夫して乳がん患者カウンセリングの時間を確保する。CENと乳腺外来スタッフ等の連携をより円滑にするための連絡方法を検討していく。

## PB-132

### 当院における緩和ケアチーム活動から見てきた現状と課題

秦野赤十字病院 看護部

○室川 真由美、伊東 幸穂、渡辺 和歌子、末武 亜衣子、荒井 悟、高田 賢、蓮尾 公篤

【はじめに】 当院では、緩和ケア専門医や精神科医が不在の中で、緩和ケア研修会を修了した外科医2名と緩和ケア認定看護師が中心となり2013年より緩和ケアチーム(以下PCT)を立ち上げ1年が経過した。

【目的】 この1年の活動を振り返り、現状と課題について報告する。

【結果】 相談依頼がなくとも院内ラウンドを週1回実施、また、オピオイドを使用患者に対しカルテ上の回診を行なっている。ラウンド時、依頼はないが看護師より症状緩和やオピオイドの使用法に困惑し相談されることがある。PCTの介入条件として主治医の承諾を得ることとしている。2013年5月～2014年3月までの依頼件数は78件、依頼はないがラウンドにて看護師より相談された件数18件うち7件はその後PCTへ介入依頼があった。科別依頼件数は外科が全体の53%、血液内科14%、消化器内科、泌尿器科の順である。依頼内容としては症状緩和、特に疼痛に関することだった。

【考察】 依頼件数が外科、血液内科に多いのは、PCTメンバーが所属しており部署スタッフへの周知および主治医への橋渡しの役割を行なっていることが考えられる。看護師へはPCTの存在は周知されつつある。しかし、PCTへ依頼をしたいと思っても主治医へ相談しにくい現状があり、依頼への壁があると考えられる。立ち上げて1年ではあるが院内に緩和ケアは根付いていると考える。今後、チーム医療の充実のためにリンクナースの配置と医師へ緩和ケアに対し関心が高められるためのアプローチ方法の検討が必要と考える。また、患者・家族に緩和ケアを知ってもらい、自らPCTの介入を希望できるようにしていくことや緩和ケア外来開設を検討していくことが必要である。

## PB-131

### 知りたい!今!に応える緩和ケアデリバリー勉強会の取り組み

京都第二赤十字病院 緩和ケアチーム

○能勢 真梨子、西谷 葉子、浅野 耕太、柿原 直樹、河端 秀明、多賀 千明、西川 正典、神田 英一郎、西村 暢子

【はじめに】 当院では日勤終了後にはほぼ毎日どこかで勉強会が開催されており、参加する看護師は自己研鑽とはいえ時間の調整に苦慮している。また、全体で開催される集合研修では限界もあり、いま目の前にいる患者に対する困り事がタイムリーに解決できる内容でないこともある。当院でも緩和ケアチーム(PCT)主催の緩和医療勉強会を年7回開催していたが、病棟看護師にとってより実践的でニーズに即した内容の勉強会とするためにPCTメンバーが各病棟へ向かい「デリバリー勉強会」を実施した取り組みを報告する。

【結果】 緩和ケアリンクナースに、病棟での緩和ケアに関する勉強会についての希望を聞きメニューを選定した。講師は歯科医師、医療ソーシャルワーカーを含むPCT多職種メンバーで構成し、誰でもいつでも実施できるようにベーシックなメニューのスライドはPCTで作成した。さらに、依頼病棟の緩和ケアリンクナースと連携し病棟のニーズを取り入れて今の困り事に対応できる内容とした。集合研修と異なり、1名でも希望があればデリバリー勉強会を実施するという広報で開始した。参加者からは、「病棟内で開催されることで参加しやすい」と意見があり、内容の理解についても病棟のニーズを把握し内容を検討したことで「理解しやすいものであり明日からのケアに活かせる」という声が多く聞かれた。

【結論】 デリバリー形式にすることで病棟看護師は、いま目の前にいる患者のケアで困っている事や知りたい事をタイムリーに聞くことができ、実践をイメージできたことで、より理解が深まったと考える。今後も対象のニーズを充足することができるデリバリー形式を継続し、看護の質の向上につなげていくことが課題である。

## PB-133

### 当院における緩和ケアチームの活動の現状と課題

京都第一赤十字病院 緩和ケアチーム

○中溝 順子、田中 結美、藤田 和子、岡本 恵、小川 奈保、富井 真一、下村 純子、大上 真裕子、佐藤 文寛、片木 千景

【目的】 平成25年度の入院患者を対象とした緩和ケアチーム(以下PCTとする)へのコンサルテーション依頼内容から当院のPCT活動の現状を明らかにする。

【方法】 平成25年度の入院患者に対するPCTコンサルテーション依頼内容について、依頼診療科、依頼目的、原疾患、治療の状況、性別、年齢、PCTの平均介入日数、介入職種、退院時の転帰などのデータを集計した。

【結果】 依頼件数は129件、診療科別では泌尿器科29件、外科24件、呼吸器内科23件の順に多かった。原疾患は、肺がん23件、胃がん16件、大腸がん15件の順で多かった。依頼時にがんに対する治療を受けていた患者の割合は54%、性別は男52%、女48%、平均年齢63.8歳であった。依頼目的は痛みのコントロールが75件、心理的サポート46件、痛み以外の身体症状37件の順で多かった。介入を行ったチーム員の職種は医師、看護師、薬剤師以外に、心理士(33%)、リハビリテーション技師(24%)であった。PCT介入平均日数は19.7日であった。転帰としては、退院50%(うち、在宅支援42%)、転院17%(うち、ホスピス・緩和ケア病棟68%)、死亡33%であった。在宅療養または転院の調整中に、当院で亡くなった患者の割合は28%であった。

【考察】 依頼対象となった患者の半数以上は、何らかの形でがんに対する治療中であり、その後の経過に応じて多職種のチーム医療を継続したことにより、患者を多面的にサポートする一助になったと思われる。希望されていた療養の場への移行が不満足だった症例が3割という現状から、意思決定支援と退院調整の時期のタイミングが課題である。